大岡政談

村井長慶調合机

元岡徹太郎編輯

四編中

へ14
873
11

特 へ14 873 11

873 11

大岡政談　村井長庵調合机　巻之十一

東京　元岡維則編次

第廿一回　高士の深智少婦の奇計を授く

大事を抱きたるの身、自ら小事を恐れるの意有り。宗清門侠客ぐ示言にて復念を発し。又長田ぐ居所を探ひ出ろど長田も速く其情を察し。他に身を隠しけまで。宗清門金蔵たぐみて今ハ手段に拾ま。呂義獅ぐ仇乃を掛りのみを探索しぬ。さるとも前金乃援を。侠客ぐ家に驚く交加しく。四表八表に流言を成さ形から。遍世ぐ顔容義顰くしく。近辺乃壮佼等互ひに誘ひ袖引ん心組せ。噂話。不図も風説使りに聞出し。大事を知へ当る

人々の身。是等乃浮き沈み。肝要なる。此の妨害やとも成らんと。流石八年長く身に思慮深く。性に斯と示せば。聴き入り好く密に恵ひ能も心を付やさしく。色恋の道に迷ひ引出さるの男と書き残し付置て。落涙有つて亡きあの霊へ対しても。泳ぎる涙有り。極人とも今より心を砕りねさえば。極人に成を。我を二度と見角に出さるるのと。心を付ても。若し。湊を見を振ん御ハ。さらに同へ。宮藤つ中。梅の佐永氏の舎の清く。数面。此度に訪来て。遠山氏等を法共。撃剣を試さらるに非ずや。逐て。愚ども。重りなれば。左二郎に。行け。身の引請等を。ハ月等。夫人。清合ろ。早速にる。婚ひん。左に成るべくと。勧めたり。

二度客を。招く。既に。佐永氏異論なく。終りもさ。ぶ。ひ。此ハ。行くまで。好く。婚を。媒妁。諸岡の。姫を。立さるるにも。一朝一夕のうに。難ぞ。和度原。う。徳永氏。好く。庫ろう。餐念なく。打振へく。宿有。福蔵。是。と。頻りに。頼。調を。迎。宮藤つ。打点頭。此。旨。旨。旨。一日。梅に。迎。左二郎夫婦に。達て。事の。次第を。告ぐ。遅。身を。頭。中。我。彼。し。けるに。左二郎。是。掛ぐ。落。乱。もぐ。異議。有。頼り。ん。都。樹へ。ろ。斯。ぐ。二度客に。報。て。宮藤つ。自ら。遅。を。梅へ。使ひ。引。ぐ。左二郎。昔。う。迎。を。引。佐。家に。郎。せ。志。有。の。身。無。う。て。日。送。べ。ま。く。頻に。衛。流。極。武。藝。の。道。熟。る。さ。べ。も。文。華。ぎ。ぎ。ず。お。稽に。随。従。て。漢。書。学。法。を。学。べ。と。本。日。文。堂に

俠〻しめ給ふ。たゞ志〻有る男婦。英才を論言と感ぜず。勢力を事有る者。流に外出せるるもあけまぐ。今るに四年の星霜を送り逐世を見る人も最少かりき。寔に義掛が寃屈と憐れむを俗なる人、まのきが中に。まの平が心を開めるる。別て切にて日夜忘れ時あり或年の事なり。滝まの逢ゆ〻一字の居酒屋に入り。居に腰を掛〻サー汁を肴を取り。徳利の酒を猪口に注ぎ。ぐ〻と呑居るに。ぐ〻有る陶器の器物を取り。同〻まの平が情らに腰掛〻。酒肴を取り。個候ある酒を喫する者有り。見別なるぞ。瀬戸物商の忠を潔なり。一ツ二ツの難儀より。忽地心安く。あり。涙を五に居所を知し。同じ旅商ひする我〻なれぞ。切金よりも切なる面有べ〻。あんど語り合せ。隣あるべ〻家に訪ひんを約して。

日の暮〻に此酒店を出で。右と左に立別をけるぞ。後又周り逢す。二三度有る。其後忠を厨。南の廣り。まの平が寓居に去ぬう。土産の一樽と出して。義呑明さんと勧めたり。まの平見を見る。忠を厨が訪来る志と感ず。斯る草宅に尋ね来らる。厚志最も頼もしき人として。先斗ふ酒ト。肴を整へ来つる。まの平乃酒を自ら温め。盃を勧めく頻も忠を厨を餐慰め。少〻酔く真よりけるに。世上皆貧人多し。彼の如く友人とともに。快く酒を酌ぐ。日頃の憂鬱を散ずるハ。実に天ぐ命延しく迚も寿年金の無き我々。出世発達しく。居商と成らん事ハ思ひも寄らぬ。只管平〻平安に。世を送るを楽〻〻せりと。語り出せバ忠を厨半にて真平ご説と打消し。左有る愚痴とを体ね。人の窮達を知れ

ざるの。大凡正直にして。節儉を守り。家業に急なる人は。出世為
やすく。奢なり。奸佞邪智なる者は。立身出世なるを見る。現に我
知る者に。弟を殺して金を奪ひ。其資本金にて。奢と成し。今は
都合を宜くなり〳〵。一家をなりたくなる男有り。夫が為不人寛枉
に死し〳〵なりとなる。是も俗の諺に云へる。凡文盛んにして。神常ならざるの
譬。何の妨げ。殃も来らず。惜しや正直一徹なる和尚。何ぞ世を形なく
思ふ由有んと。怪先けるに。其平此の語を聞く。急地絶に恐へ和尚此の
咄し。回生の仇乃事無てハ。さらと。絶世も現はさず。言く却ひ男
が。説く義一理有り。我が輩天未だ福ひを下しあはざる成ら。今より異
見ふ勉つて。屈せず稼ぎ見るべし。去ても。弟殺しの物語り。

殺ら〳〵く。面白き事敵かり。也何ある因縁より起りしや。酒の害に毒
ふと。咄しなさるとて。望めば。忠兵衛ハ面を左右に振り。昔の人も。移か
らべ。誹うに語り聞かさんなれども。今落生し居る男なれば。餘り人
乃耳に入るも。宜しからぬ。コハ只和尚を力付んが為に。聖人に引く。
云たるのと。強て問事無用なりと。敢く姓名だも語らず。其平涙
なく。他乃無様に移り。竟にを夜一樽の酒を呑尽して。延興湖に投り
けるバ。忠兵衛ハ別段く家に返りて。頭に
腕を組。扨も似寄りたる咄し。我実事に有るべきなれ。彼も心付しと
見へ。秘しく委敷と云はで。此程に捨て謂ハず。此等を揺らずんば。
爭でか賊の手掛を知る事を得んと。快く酔ふる酒も。忽ちに醒め

角まる間に。夜も明けまで遊と急ぎて喝さぶ拍に知り。左一郎に逢て。忠を閑ぐ酒上の物語りと。有の侍に告げ。僕ぞ〜十を御と殺せし械乃。事件を思ふ。左まで材并長箱ぐ事あるべし。越〜ぐら。世にを似たる事は多くり。他に斬る事敢の有〜ゆも知まで。為に為べきと商賤成せで。左一郎深く尋思〜。真平を膝近く進すめ。他に似せる有らんと疑ふ。尤あまと。此の事件中に多く有るるに非も。我思ふに大抵長箱ぐ為業成らん。他を撰るゆ。暫く為さ遠ば夫迄の骨折損さて。飽まぐも手忠を活に語るる計と変〜見ふ。家ぐ一恵を閑。因類成らんも初まで。是を聚きさい出むるに。一つの御有り。人たるもの名其好む事物能く好む道に濁

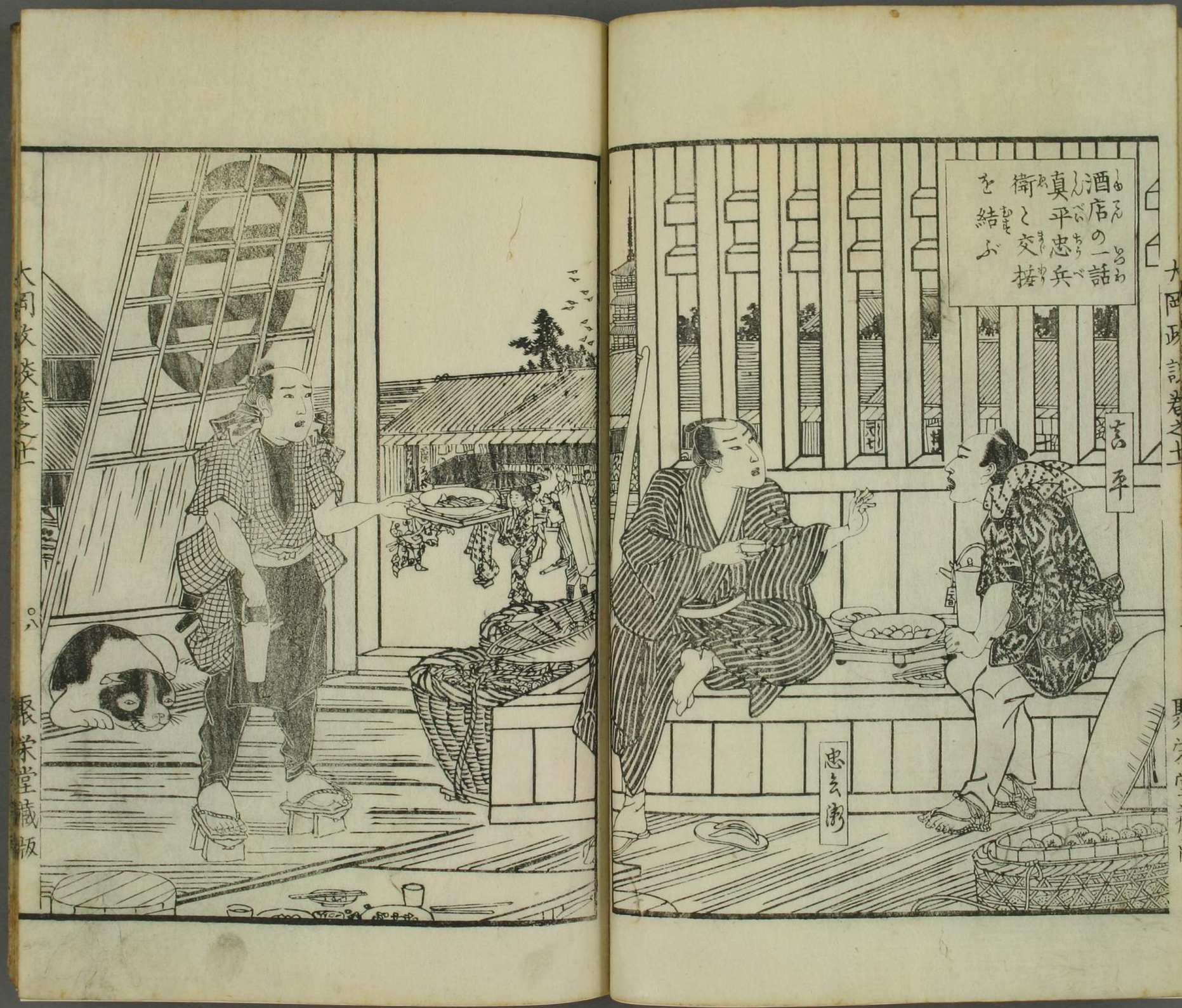
まる。童にい命をも失ふ。是平ゝたる者の情く。彼情実を知り。婦妓を好むと将ま客畜にて。金銀を野ふると好むと。何事も泥一疵有べ〜。和まぐ心易く成りたるを幸ひに聖と好ま拔撰索〜。是見。其癖に依く。施まと成きの計策有り。心得〜と況所せ。素平い強従〜。彼が好まを撰り来らんのゝい景易き事に侍り。先生是ぐ。程迄有く。如他く撰り来らん。小〜の日数を待ちまと。変ち〜。数に徳永ふ別きて。已ぐ寓舎に立返り。如まを平情く思ふに。侠客已に長養ぐ業ぞらんと見を立たり。今徳永氏ぐ推察も是をさまて。変清相同じ。迷ぐ忠を閑を欺きさい〜むる計ごを成さばやと。舎心決〜。是まを思慮深き。徳永。示を言葉乃如くにて。悪きゆい

有まじこと。此に於て。夢く仮田町に住居し。或日忠三郎が家に尋れ
ゆき。但居の様子と見まこば同じ裏家住まて。妻も有らざる淋か
り。戸に鎖一有るに誰方迄。隣の家にて忠三郎が女人の由
と告げ。杉ヶ谷口に腰打掛け。帰宅の程を待てば此の家の老
女。烟草の火かぶと喫へ合ひ。南より返らるる剣呑の。少の間
待よ。と。獨孤身の老い先。寄の事に名知合有りと云つ。二つ
の世と思ひ。淋い頼りに忠三郎が嘗所とぞ成。かりる。三年来
面に老婆が弱語りを聞つ。コハ多辯の老女でこの。嘗と驚き問ひ
癖と。丸出さんも。まうと。思ひ心を利して。少の計の菓子と慈へ来り。
嫗ひよ。張出計曲者。鄰の主が返り。間も有ん。淋家に居て。

舞まこ。寛々。物語を聞んと。件の菓子を聞む。老婆い。葉の文
ぶ。成。又頼りに忠三郎が嘗所とぞ云へば。時三年老婆と苦
に。葉と。契と。問つる。程無偏。近頃心易く。ものこそ。但居隔りなど
ぞ。淋き。事と。思ひ。日々。稼ぐ人なるに。何の。事。極る。
見ぞ。稲荷の事に。有ぬ。何故に。妻も持ざる。何ぞ。一癖有つる
ぞ。月に。問ひ。分解ん。又。強に。勧め。折ふれ。異見。云。
成らん。知りぬ。有ぬ。言に。示。云へば。老女い。驚。先の。考へも。
図に。乗り。問へ。忠三郎。其年。も。似合ぬ。一癖。有り。夫。落に。妻も
果て。果く。此の。四月。こ。有き。離別。く。理。元へ。返り。有り。其。後。乃
起。思い。忠三郎。て。兎角。若き。女。好。番。の。女。又。い。慈。姫。んで

泥水くさき者とのこ琉と成り。稚ぎ溜たる令を取りて妻、歳
経らもと苦ふ病て妻ハ度こ異見と加へもこゝも年長一人の癖ハ中々
に体まで離縁の起原ハ是故なり。此間妻に成んこせ婦女有りこゝ年の不
相当と嫌ひ破棄し成りし。程なくに若き婦をまにのんとて夜ハ何まこゝら
程びにのり迎稚るこ語り出せば去る年大いに驚ひ又年に儲る巻勧
まもし。我方人ゐれば一度ハ異見と加へ見ん今掛り令る婦人ハ何に貴尾
敵まに入る稚るゆやと。問返せば老女も又何こゝ驚ひ変去るものゆべき。
必らず稚ぎ人令を奪ふのこ色の癖令りせば忍地裏間口と張る。漸
物商のこゝ成るべきをこ身を指考して密語却も稚こゝ迎る思言
断方と押明こゝ問にのまとばこの年も老安に言謝ゐ。此に思を陽が家に

癖を稚ぎ。笑話の後相共に聊の酒を買求め令ハ遠高も分けまべこ人
對癖に大仏殿とこゝ。賞とを乃隅こ有こゝ頻りに酒とゞ酌ける時ハ
平詐こゝ分けるハ和年ゐゞ妻有らゞ。我に一人の婦有り幸ひ世話成ん彼
こ我も稚方ゐまゞ我ハ故有こゝ妻を迎へざる心得こゝ和を稚方ゐこゝ。世こゝ迎ら
んハまゞ求りこゝ和を忠こゝ勝ゐ笑ひ他人に世話受こゝ妻ハ情令の
薄きゐ。吾供ハ自己乃働こゝ好める婦をまにのまんと思ふ孫に
人こ違ひ至こゝ若き婦女を婚ゐまにのまこゝ人の媒妁こゝ妻ハ大抵別こ
語まゞ年こゝ若年果こゝ和を忠斯有こゝ慧ゐぬ去法にこゝ我こに
ゐる婦ハ二十才を越こゝけりこゝ若年ひつ一癖已に探り得乃り此乃
上ハ少揺るに及ばゞこゝ思惟こゝ稚亜こゝ別こゝ迎り法求ぶ浄


酒店の一話
真平忠兵衛と交接を結ぶ
真平
忠兵衛
大岡政談巻之十
聚栄堂蔵版

に至つて詳らかに実情を陳述しぬ。左一郎少弁つて密かに笑ひ此の癖世上の人に多し。今欺んかの婦女だり頂らば迷つて云はせ易し。能く安んじ給へ。我策を運らさん。和主は程能く忠を謝ず家に交加せよ。時を計つて我方より報知せん。必ず人に告ぐる事勿れ。云合点。左一郎平を家に返しける。左一郎は猶情に思案を成し。女を餌として云はせぞんば彼必らず稲妻と宿るべし。確と用ひて密計を行ふべんと頻りに思慮する折り遅世が密姦と聊め三年四年乃居別楽に四舎云繁も稍脱たり。標致い別に義藻し。俄りを改め風俗を変へば媚きたる義を成。拉君の婿と成んと幸ひ此の娘に説含め欺き見むやと心に計り考る物なり。奥に術に入て遅世と猪迫く招ぎ。主の辛ぎ揺り来りし事情を。

細に説含め身ぎ父の仇と報ん心を掛も此の一巻に有るべく思へり聞半て全く人事に迷ひ有るべ支迫の不運ふしぎ。彼方も有らぎれども我が推せ知るべき是本懐と達するの時く忠を謝を欺き実事を出さ考ひる計と成を若今ち身に外に有らぎ功は第一と何辛色に成ぬ偽て云ひる計と知らぬ。よく得心有らば其用計を数へんと心を問ふ。遅世は潔に頭を擡げ。亡き父お為にとく。今より辛苦若と為ての妾ぎ身。何事とく。身に勤めらるる程の事は。ふつを擢きて行ひ見ん。強い貧とで行山里に養育らるる。多の抜さは。何事の道を。だに得知らぎ。嬌媚たる難妓の如き。男を嬲る。欺むくの浮し業を味ひも沼学ばれぎ。巴為損しの妻くんと憂らるのこたをぎ妾ぎでハ。

彼くの年〻の命せ。必らずや背為ると。兼心邪なりて急に左弟大に奏院たのみに懸退為ひそ。義賊と被行為と疑ひ中そ傾國の風有り。彩く心迷ひたるゝ。出い其什と知るゝ。忠義清ら妻めるゝ。物陸き他りの嬢に非ず。去る年能く手情を告るり。吾係今ろ〻ろ〻と成る。婦と連れ〻ん弟を携る手有べし。事大危熟〻考へ考べき事なれば。甘く。彼ら家に却き。能く酒席の相手と成し。深く押まと。惡きと言ゆらるべし。然〻く注に惑を以て。彼を誘ひ引で。必らず心を動し。縄を花し〻く。出身と妻に為んの思想を起さん。彼密に内に向ひ。夫婦と成ん〻語と出さば手付と失ふべ。城の栗と同うべ。其の時に至り告ぎわば此の二婦人に入らず〻思惟成さば。

必らず明ふ。秘まる有を語〻ん。我張と疑く。云語の続くを待ち。現ハも出く對後成し。證據の人と為らしめん。事我方寸の内に有り。絵に落ひらまゝ〻ら〻説示せば。迷世思案して又問ふる。張大凡ハ解りたれば。一ツの疑ハき表ひり。彼今悪の〻ま〻くぶうて。誘ひ取けばとて。関係の者。弟殺〻の事故を少探らぶ。彼疑ひと起〻。告ざるる必定なん。〻〻治るとも。虜事を述ん。見妻ら頻ハく男ふ変く。抑知〻ざるを問ハに。人〻の情に関して。苦る堪に忍ぶ。強ひ問ハもして。人間〻〻家事と告ぐ。悪を隠ぶ事の平に大事の二ツと見り〻も。情に関し。譬に引て語も。敢く事の平ら始めより。賊と問〻に有まじ。悪情ふ用ゆる。治。千万言と述る〻も。る情連続の治に有ぶ。彼疑ハ有く。ア〻ア〻に悪と

長栄堂蔵版

為ん。弟殺しの事実を問出さば。事は新に物改たまつて。為し難き
連續為ば。強に悪婦女子の関係せざる問事なり。是を如何んせんと。
千思百思をはんや。妾まづ因の連續千理を考へ出て。先生を呼り
殺へ申べくと雖ども問へり。左衛門優乃柢を磨き。おの身少婦に似ず。頗る
博を好む。昔者孟軻。博を好んで。孔道迷へり明なり。我今博じて以て
秘計の奥旨を説ん。聞きよ因果ん。人何ぞ実情を告ん。今変に
疾病を患る者有り。因果つて病の原起を問へば。患者恥を包む
事なし。その事由起為を告ぐ。是将医として我病を治し易ら
ざめんが為ゆへ。事実を言しもする変我為にするに有り。故に威かく
権詐して。自ら病夫の実事を知る。人の秘事を云ひ出ん為なり。

利益する変を要へ。誰か能く事を告ん。試に云ん。今患者閉門
を塞ぎ為ん。心煩らにして疾事を語ども妻を侍る云ざるべ妻を以ども得
ること得ざるべし。則ち利益不利なり。利を得んが為に言難きことを云ん。歌
を見れば肝を推べき変し。又婦女の身に出て成のる孔を押問ふ
こも因とをきにあらざる。嫁姑と成。義兄弟の約を結ぶ疑しきを問ひ。怪
しきを糾つ。惑の疑ふ事少けれども而して後媒妁為と為る。是世上
の人情なり。世人今正に金く他へ嫁せんと為るに夫婚く成べきの良人。
不善不義乃汚ひ有ると少べば心に快しして。嫁と為るも。婦女の夫を
探む。是人不実の情し疑ふ変ば得らに問ひ強て撰るも。何の異やと
為る事有ん。彼の患を防己に十の平に向ひ我が知る者に弟を殺しろく

と称り。又人物容貌一番の男子わかく〻の容有り。極て云ざる人間類り
迷ひやの疑心起らざる中も〻妻と成て生涯身を任せんと為たる婦女
是と強問に因の無き程有らば。其うち無に為んの為出ざる
内ハ問と発まべうも。他人と他人何ぞ強問ふの因有らん。此の道理我
心に納め勤めく患を除ぶ心と動うも見るもと其場に立つく問ふまと
いへども彼秘〻云ざるハ必らず其城ハ知る事有ればなり。漏さば身
の大事及ぶ。但今妻なりしも若るの有ども云ざるとも其ハ察る術
も有り。其事に若る業動。推量るに成て知せ〻共ならば大抵身を過
香に引さも。歌に安つく。浮に酒り抜べし。義婦の男を歌く思ふ人ハ
安き抜り。方寸思ぶ男に情を通ぜば。故に斯く頻の〻云て也と説諭しけり。

第二十三回　雨夜の對酒義婦陶商を歌く

五一郎怒切に腹を引き。論辯理の應ずる変と云く。説諭をけれ
バ。遊色ハ酒に心狗に落人まるゝも。物堅き武士の家に育られ。五倫ら
ぬ。に。禀性多く柔質淫恣乱行を嫌ひ婦道を守るの意盛なれば。
氣ふ〻ま事業まるゝ。只亡き父の仇を知り得んが為に。受引る彩
波永が密計物を則まこ。拒君姦女乃輩に育られ。笑つく
應と成べきを。只不無げに面をゆ。乳房を搖揚げ。
寒き居を思業の体。志を推量つく。傍より極り
言葉を添へ去日の密談愈定り者ハ。五一郎忽地を起り成
し。日ハ見知り有る藝妓を雇来つく。遂世が身の作り髪形までと

今風に似り改さしめ。將た酒席の取廻し。等閑今藝妓等が爲
乃大概。言語應對なんど。惹情と教授せしむ。近世諸技に怪愧く
きく。学び得る事最多かり。左一郎衣服珠簪の類尽く流行の物を集
め。近世に授與して。其の仕方揚たる容姿を見るに。美容の顔帷
山の眉て笑を含め。櫻桃霞中に発きて春をして艶ならしむる
乃姿有り。細腰楊柳毎に伸く。素手に繡衣をつまぐる有様。唐土九
呉姫越艶も斯く有らん。の是此の窈窕たる美人情を含んぐ
艶姿と寄ぶ。誰か能く心を動さざらん。氷雪の膚へ翠雲の鬟羅色
今迄の田舎娘しに見違る如く異り。新粧精を尽くして自ら
媚を献ずるの状。絶代の名妓接君なる。亦及ぶ所きらず

ずして疑る。左一郎。悅び是計就べきの秋と。漸く真平を事寄しく。
先迄世間の作りの改りたるを見せ。且示せも由く幸に近世廣世の秘法の
役小常にあり。吾力を盡くして斯。浮世風に仕立ん。彼を欺ら
右むるゆゑ。ゆゑ難き事有れど。元こうい遊事体眼乃折を窺ひ。
連れ行く酒席の相手と爲し。成丈い彼が懇者を結ぶしめよ。由人
毋ハ義くしく計略と金元置たるもば心を合せ謀る者し。娘嬢乃
身ハ双親無くして自ら引取り。世話やく婦女と作り。忠義を集
り果せ。定て料理屋小伴ひ。拉戯の場丹も赴くこと有ん。其用
備金元又渡し置ありとて。五行の金を出し與へ。拉戯代の頭序と
て。為損ぜるゆゑ。如き流金めゆ真平ハ情んでゆゑを受け。要を退つ

て鬱く思を開ぐ在宅を窺ひ直に至て主の村に行て瀧水
身を浴して炎暑の温熱を避んを勧めたり。思平衡に
おとこ頭今朝大に早く今うり其拵びを催さんと意おけをを。
真平心悦び計成るの小口と。急に中梯。吾傍一個の婦人と伴
ひ引也。和尚吾家まで来つゝ待ゐ給へ。今うり走り行く連
来んかと云へば思を開ハ笑を含て拵せんに婦人有ハ又興を添るなり。故
に娘を将拵君を迎く伴ひ来るとも。我も身支度して。ゆく和尚が
家に到り待んと登つゝも。婦を故改て用ることを成せば。主人
主てそをくに小梅へ走り行き。主人に向て如何々の由を告ぐ。主人
ハ驚らしき表を出して主平に被改せしめ。迎世が身の拵へ驚ふ

ゐを待て。イザ同道有べしと渡しけるとバ。主人年則ち迎世を伴ひ。
陸永夫婦に別まて家と主人つ。急ぎ我家に連迎とバ主人つゝ待
居ける思を清て改迎世が義顔きを見て。頻に赤眺め給く忙を
しく居たりしを。不審に思ひ問ける拵婦くゝ標致と云ひ世にも
類なき美人。何とも連来らるゝ。和尚が氏族の娘にはくも有るに
やと驚きバ。主人笑て迎世を引合し。驚しらるゝ。氏族の若の娘
なるが。此の間双親に死かれ外に便る可き兄弟も無。冷御方に引れて
世話をするなり。元より保の人を養ひ取とバ。別て心安く為る
人に粉紛ひたり。尚人とても程なく心労に軽も賛しつゝめと驚し
なるバ。今日僕と君とが拵まを喜ひに付今を思ひ付う。吉なるかの身の

徳永が智計
逃亡をしらく
藝妓の情態
を学ぶべし
おそよ
吉平
藝妓

小梅村
左一郎
おふさ

上方わかぶ心まひ小ぶしもかゝと落ぶ。其ゆを刈り沼て忠兵衛思ひ
思ふ稚ぶ平等好き者の身内ゆい似合ぬ義人ぶ。芝居の別吕自慢に
連歩いも無程かゝぶ我財の多く有る身なりせば。今の威光りて。平
とくるあ。是の娘をまに入れ物見くる処舟宿の娘う。藝妓の徒う。何
も意氣ある渡世の家に養育しかるべし。去ども一見しく捨ぶ。
こゝかき事こまんど胸に計り。日の長けぎる内に速くその憐邪む
らんと通云べぶ平逐世もかゝくく。猶く戸を閉てこゝ人ハ神田を
立出船くぶ戦を張りつ。茶屋漁くまる里に忘れ。山地の霊神
霊社へ参詣ゆく。是より忠兵衛ぶ平等花泉に掛り。暫の間交ぶの
戦拵と成しぬ。ゆく変に海老屋扇屋とく。名の聞きたる割烹店

有り。清し清つく忠兵衛ハ逐世真平の二個に勧ら扇屋の描ぶ盃つく
義酒一杯と酌んと仕せり。ぶ平是に酔ひ則ち歩連今く庭傳ひの一間に
座を定め種ぶ珍味を集めて宴拵を催しぬ逐世ハ幕く寡席の丸廻し
習ハ馬けぶハ笑語軽雑。演ぶ濃ぶく。勤て座興を助る状尋
常の藝妓の及ぶ所も非ぶ。忠兵衛ハ頻りに盃を奪ふ。ぶ平が座と
ぶく二人居合ハ為ぶ打ち見合ひ二言の戦拵と。挑婦女の心を探
見る。微酔の紅顔情を含んぶ。其麗の亦恋の逸ぶ。忠兵衛
ハ若き時ぶ婦女を欺く業ハ則ち拵ぶ戦拵と勇ぶ。逐ぶ
と流涙小姫のぶ。ぶく成さん下心有る義婦。言葉の艶ぶ去るめもとば
堂欺くまぶ。忠兵衛ハ拵に乗ぶ。ぶく口流落て我書に名

ものとて。拙者に御と考慮。彼是とする内吹食も終りて後。極て世の別家法を
きまりの通をぐら生涯の暇を揚て主人の娘にて。
子婦の分際。病ある人に猶付らるゝ心組。仮令ハ和尚ゞ娘ゆえ成し。婿
あゞ迎へらるゝ数計にて。外雲あゞる雲ぬめ。ぐまで年ハ顧ゝ赤笑ひ云
しべく玉候をけ色ハ引孔しと無ひに家に移く。婚と連ん被き汁
ひあまとゞ見る数も生き貧家の多婦んぐ国業と滅らんとく秘家に
贅人なる者も有まゝきなり。我思ふにハ心と初り合て来の便りやも
成るべき人に猶付んと思ふ者ゞ甚ゞくも年浦の我要中にあ
ゞる人に猶付ん人思ふも者也し婦め居たゞ者り。たゞ主人も又
有ゞ思ひん心に果ざるハ生涯添遠難し。心後れ時宜に隠ひ。分の者分を

為んと接拒し。此を思ひを出て忠之清心重容に寄悦去年ゞ他中ゞく
有ゝハ娘と我ゞ物に為んゞ宗易に有り。オ力して先に婦とゞ入る。
芸ひ夏ゝく生涯の暇ゝあに成さんと。兎角して家路に別ゞ時に出り。我毎拒
と絶して忠之清ハ留所に通りゞる。主年ハ迷世と將ゝく小物に生涯。旨
の拒事忠之清ゞ多他迷世に無意したる状と見に在所に苦げ。氏の時を
失ハぬ。ゞく嬢婦を体ひゞて数果せんと清ハ他家ハ笑つゞに入り見ゞに
二個ゞ働きゞりと賞深して年ゞく主之に仕せけるハ年氏の清ハ迷世
と將て。忠之清を同拒ゞるゞ数留ゞり。文加稍思ゞく。今ハ何の隔る
変もゞけまゞハ忠之清ゞ猶を押量ゞく。迷世ハ我ゞに一策と運らし。
人年ゞの所と見ゞく。忠之郎に訪る極ハ時日の時日ハ御の暇ゞる者ゞく。

家のこと夫婦他出しく一酒と成り。さて夜妻のこと留守居なる内。和後者を
さも思ひんぐ来りみいんや。二個面白く酒呑合さんと密語して忍ぶ者の微
笑こと我ら方に迷くこう語り見んと思ひ居なりて其人形をに
前尾熊き密合の日と示さるる。約と迷へば思ひ切んと答をば。
為浜しなりと迷世に語り約ん物の冷笑つも小梅に三郎夫婦に
如何ここと告げ如使水いきて大に笑ひ白痴の限り毎に忠言剛勇。已に云
るかき約束なるしこと夜に出ぐ思ひ来ぶ。我宅には隠し行る
に便利宜しい。如何に未だ迷へ切て一思を呼ん。我は宅の内に隠し居て虚実
と窺ひ。迷奴今こと来ぶ思ふ俗に謀ひ妻んこと入れのこと知りと宅の晦日
の日とぞ待たりこと。斯て当に知りけれい五郎に形のかく出給と

云ふ清門が家に行くこと已に妻の二間に隠れ。すくべき酒と補理特さ
ぬしの酒肴の昌と甚くて。迷世に酒しまくべ迷く酒と浴助先く。
半解ハしぬべしこと。又問べき宿の稲事を教へこと今や迷しと
待居きり。扨ふしぬの日雪方より微雨降つく。人の往来すくふ
橋の辺最寂寥たり。忠三郎ハ婦女に約さまて身乃今宵こそ
夫婦の契約と結び前尾熊を呼べる時なりと思ひ迷たり。雪
方より我家と出く。細雨と降こく。忍びやうに小梅に到り。蓑て
宅をとぞ出けるを。見迷ふるこく。五郎が家
の入口に行こ。内の様子と窺の見こく。ひそく戸を叩けば。迷世ハ地
心づき。自ら出まつく忠三郎が雪蓑を見るこ。戸を押開け

て後ひ人と云まりわる一間に暮向しつ孫く推せし海者を移し
ものうろう酒を温めもてなしつ雑くも雪ふるひしく今宵のめき間の
冥きハしいなど緩々酒酌んで勘弥せんと思ひて粗四び嘗へ嘗へ
ハ程くの戯を咄しに逝せも微酔の紅を揚る折虎蔵を称へ。
今宵の對酒徳に赤縄乃神ゝ引合ふ人に有るめ見ようの
隔てあ中と成りの素一ト昔夢為ん如何に今ゝ之ゝ思ハ餐
せざりしかど新密に招ゝ心大元推しめもバ問見るこゝ為を
摺り寄まぶ逝世ハ持ゝ置ゝトゝ為きて徳捨合しもれ恵の程
知りし。身と生涯連流ん事ハ別に於て すりるゝ。巳ての疑惑も
るる有り。見ときへに問明らめ。疑の念撒あバ。ゝゝに陥べし。

仮初も夫婦と成しし百年の身を任せんに陥める変者てハ獲て
得も愛引を為し難ゝ答まぶ恵渝ハ大に思審う。我何ゝ
て汚出せし。ゝ事有らぶ。疑ひ人金思ひぶ憚る事ハ夫ゝ有し問見
らまゝ月に知る程の事実ハ偉ゝ小説知ゝ大抵推しなり。池に陥せ
婦女有と疑ふ。ゝ人ハ逝世ハ若し備き妻ゝ問有ゝ閑ゝ云
幕る由に應ゝ為しめん。逝も流逸らまゝ程ゝ寒ぎ為る体に
恵ゝ解心まぶ逼我何事ゝも殘らん。ゝ問見らまゝ。孫
紀ゝして進ゝ寄まバ逝世ハ対面ゝ推ゝ。浮ゝ為に逃ぶ恵の程乃
大事なまバ。憚ゝ中見人ゝ為ゝ心安ゝ老に弟を殺して金を奪ひ
し中の話高ゝ事ゝ程に少なり。殺ゝに事ハ珍らしゝ哀ゝ思ひ。

只何の心もなく。其事実の巨細を尋ね問に中身拒んで告ざるの由。去まべき平も甚疑惑を抱き。斯と水魚の交接を結べる中一旦自ら獨語らまとゞ。委敷問べば穏て告ざるハ思ふに其の悪徳に組せし非ぎゝ疑ひ云甚き濃く考ふまべ毒ゞ身。人目を忍べて夫婦と成らんに。斯る正事なゝぬ疑ひ有て安心成らぎ。他人同士の間ハ何ぞ七生ぎるとも。外変に眺居く氣の毒に思とゝの事くゝ。捨置るゝ。悪を傍聞ぎつゝ密に打笑ひ。コハ人の分乃大事なまべ他言ぎゝも悪うゝ思ひ。城に餘慶の吐なまべ妻妾を語らぎゝ。平生身まで。同類なるゞ故に告ざるゝに思惟有て。我も片腹痛き事にゝ。異常のる実。豈四一告れざゝる。謂有らん。巨細と聞り聞さん。必ぎゝ事を除くの外ハ他人に告ゝまとゞ。只迷ぎゝ疑惑を解んを宗とす。十云傷と報せ一家。雷落と物語りて。中お物を異ゝ見一事共ゝ。藤掛が寛行に死せ一條。已ゝ見ゝ一條を最も詳ゝに語りる。此時次の間に有て物語を少取ゝる左衛門密にゝて表口へ廻り戸を押開さて内に入て二つの隙を明け衝と二個ゞ剣酒の存に通り。袴の塵を掛つゝ座に居けゞゝの内室と見るゝ。中を落吐居と計りに土瓶き急に面色と事まべ立郎ハ静に立ゝ。ゝ我人ゝ帰宅して二人ゝ剣酒の沼中浮ゝに雪元ゝ。漸ゝ物言人の悪事ハ自ゝ悪事ゝ。遂ゝ隠ぎ難ゝ。必ぎゝ驚ゝに及ぎゝ。奴ゝ某ハ当家の主人。永左郎ゝ。

駿河台文庫

相はべき一事有るべし和尚が市の孫八殺めざるべく心を落付て暫くこの儀有
まことへべ忠義の家々置にまさる付番一頭を揚げ殺るべきの儀仕るも
憚らで婦女一人の変に推参仕り不届千万の儀仕り撫でみて僅に
数この一事さいも何事にも一通り手一のうまとと進まわぶ左衛門
持たる鉄扇置聴と実き和を始めくるるるん学の方婦人獄
ら落剛我輩も道平郎小田縁みるるの悪人村井お姫さを勇巧せしハ
原ら知り居なるべ者ども者ぞ推なる人と潜ぶ汚名を重め恥と難ん学と
延引まそなり氏族皆嘲を成し居なるもバ日有るまで度掛ぶ書をもひの
当人と成り今和ぶ張出る却さを以て出海に及ぶまり公の方問合
を蒙る打もみん氣ぶ人に乗しに乗しに吟らに有の侯を上ぶ申せ

和尚への報ぶ又五郎ら多ぶ場に於て殺さるべし出家に於て
に事ぶ出ぶ成ん迷ぶ何ぶと問ひ出問とする忠義物語
に論語と漢し通を五事を店と決め漢に一伍四什を以て騒き成。
僕ぶに知ぶ出ぶ人ぶ冷郎も多し中せ多く全く勇侯に絶せ多に有
ら和べ殺計ども多く変ハ出ぶ慢に徒人に多事の一助を仕らん者
なり。長郎殺に勇ぶ和尚河人多ぶも義氣有り我又する通る浪
人を殺と乃ん味の物を速ぶる事仕ぶ者と衛ぶ者と対法ぶ
なり。見ぶ快し盗を殺ぶ者ぶ者を殺ぶ。殺し殺ぶ者ぶ忠
義陽多ぶ者と成ぶ。世に向ぶ肩相に融事せ。世ぶ人事を
出ぶ浦ぶ歌ぶ者なり。遺恨も有ぶ長ぶと。何者に新ハ恥を成ぶる

ぞの事情を明し聞ければ異議なく昔べきと悪の道を深く辭しけるか
し歎かりしが清き誉あと恐ぞも此の郎呵くと思ひ。
和殿年長屋く業術ぞ悪き婦女子等に歎かる事を許さる。
場合に藤六が實事と思ひし人力の能くなさざる所に天善人を
助けて自ら和殿をして云ふまじき事を遂げさせ給ひしに我又喜ぶの
嬉しく礼謝の印しと云ふんすれども又此時に當に一命を投げ
返らるも宜しきへば悪き國に持し然る所を幾何の心ざしあらん
くして思と逆ふし難し無きことそ返りて情を重しく謙退して
町宿に於て我しく速に家を出るとし我家に返りけるが今
酒肉を辞して全く翻め情しく思案するに我聴ことなる事と云ふ事

に當る者を引出して其者の德を今に敬ひ其處に人殺の咎を受け心ならず連れ
有て手掛を剝へに甚時殊も今を為しきく今宵に手身を待大事を能くして人に引
出ざる事。其又密龍に海へあらず是へば悪き者に罪人逃く是事の發ち其内に。
田舎へ身を隠せしに如何なる道も定しからんやして只管に其を為して又官吏
信州松代の在に宮井村と云る所に昔日投水なして死せんと為しゝ宮沢松が母の老嫁
有りと云る者の所在知て件の義を話し。宮沢松を舞わせ。能く対話の折
藤介の為術を聞て思へ返らば則ち世話せん事を示しぬ汝は此の日に當って忠義
衛ぐ家に行ひ厚く救死の恩を謝して。程宮沢松は共に宮崎へ参りしが。一身の
活計をなさし世話致んと取極りして返りし事有り。忠衛門岡崎にて悪
ひ出で。世事の模様に愛せし成りしかれど兜に角郷里へ人を助けし我返り

沼べ恵しき巻ても為まぐ。字次和と徒を連ちく郡もちべ。相鎌雄軍
けもとご。傳ふくも雄も契合も者ちん。百ごり長べ章に字事に引
出さ出ん。白沢和ひと村の天麦を通ごもちく蛭を塞ぎせんを。
金ぎと法しく家を弁ち和代へ張り商に出ちもに原者。を鍾き
代物を伊入しく。ちく支度を巻へ報知乃天志思ふ方を書偽ちく
勿地に逆う。遷ちく生物を巻ちく。ちう雄ひに別生居ちり形だ。
張く商ひと滅しう。宮路に出ぐ。当掛逆ちう。赤の堆下にさく
うう。逆と敬く寺法ぐまぎ。出遊乃雄原地光峠を赤城して。漸く宝海
の村落まぐ出ぐり付ぬ